

2006年9月～

人間歯科学研究会報

人間歯科学研究会

〒567-0883 茨木市大手町 7-26

FAX 072-626-6519

E-mail yoshihara@gold.ocn.ne.jp

2006年の夏は、マイコプラズマ肺炎が流行した。暑さも体温を越える38℃にもなると、免疫力が低下して小児外来では通常は少ない奇病や流行性疾患が多くなるという。

歯科では、口内炎・口角炎あるいは舌炎が多発し、感染根管治療歯の急性歯槽膿瘍化や骨膜下膿瘍や顎関節炎による救急患者多かったという。小学生ではドライマウスによる口唇の粉ふき状態や無唾液状態で脱水症状をきたし、よくぞ歯科医院で受診してくれた、と治療に全力をそそぐ日も幾度かあった。

低年齢児の歯肉炎発症の多さにも驚いたが、全身症と関連していると思われる口腔疾患、特に歯列・咬合の異常の多さは今後の医学・歯学に大きな波紋を投げかけることになった。これは人間歯科学研究会に重役を与えられたということになる。

乳歯列期の前歯叢生出現率と、永久歯萌出期の萌出順序の変化、永久前歯の乳歯列内側位萌出、あるいは第2大臼歯の水平位または稔転・傾斜などの難生萌出が第1大臼歯へと異常化し始めているという報告を受けて久しいが、その後どう対処されたであろうか、はたして原因はどこにあるのかを討議されたであろうか。

人間歯科学研究会は10年間の追跡調査で幾つかの原因論を得ている。それらをふまえて咀嚼学習論にスポットを当て、咀嚼訓練具を用いた症例に発育と発達値の向上が明らかとなった。

1975年以来研究を続けた咀嚼訓練の各法の中から、科学的な根拠が得られた訓練具である“チューイングブラシ”が、最新の技術で生まれたシリコーンゴムと人間工学の粋を集めた設計によって“チューイングマスター”「CAM CAM ST」と称して完成した。これらの事実は21世紀人の咀嚼力を考える時期に適していると考えられている。

人間歯科学的見地からの情報の内訳は、人類の変化（進化？退化？）が口腔内から起こり始め、本能ともいえるべき前歯咬合の学習と修得が何らかの原因で抑止されることによって、顎・歯列咬合の発育異常が生じているという。

前歯咬合の学習の未熟が、3歳以降の臼歯咬合の学習不足を招き、その結果咀嚼能力の低下と唾液分泌量によってホルモンアンバランスが生じ、顎歯列咬合の発育と発達のバランスが崩れて、いわゆる歯科でいう歯列不正や不正咬合を生じやすくなる原因になるという理論には注目すべきところがある。

一方で唾液分泌量と血流の軟弱化（白血球とリンパ球の減少）が、大脳シナプス結合の虚弱と免疫力の低下を招き、従来より最も危惧されていた口腔疾患だけでなく、全身症と成長発育障害を招くことになるという。それぞれが相乗的に発症することから、どこかでブロックするか抵抗できる力を得なければならない。それが咀嚼学習や咬合訓練である。すなわち咀嚼咬合をマスターするための訓練具が必要であるということである。

チューイングマスター「CAM CAM ST」は、咀嚼咬合学習訓練のスタートラインではあるが、IIA期の小児には、わずかな角度と材質の改善によって（指導の方法や熱意による差はあるが）、ほぼ1ヶ月～3ヶ月で結果が得られるようになった。前歯咬合の学習量が高まり、咀嚼力を身をもって体験できる臼歯咬合への進展が期待される。運悪く臼歯咬合の学習が十分得られていないうちに永久歯が萌出すると、萌出順序の異常や交換期障害そして歯列不正を生じることになる。Mix Dentition への Step up 訓練具が待ち望まれる所以である。

咀嚼障害がなくても咬合理論上の咬合異常は年齢に関係なく生じていることは過去に報告した。全身症を有している場合は咬合異常を生じることを前提として、全身症の手術や治療だけではなく咬合調整と指導は欠かすことができないことを MYO AUSTRALIA から学びとってほしい。

今回は少々難解な MFT を解説してみたい。